

遺跡と文献伝承

上田正昭

1. 酒船石遺跡と斉明朝

『古事記』や『日本書紀』をはじめとする古文献とその伝承にみえる記載と考古学の発掘調査の成果とが対応する事例はきわめて少ない。ところが1999年の1月19日に発表された奈良県明日香村の飛鳥池遺跡からの大量の富本銭の出土、ついで同年6月14日に公表された明日香村の飛鳥京跡出水苑池遺構、さらに2000年の2月22日に公開された酒船石遺跡の第12次調査の内容には、それぞれが『日本書紀』の記述とみごとに符合するところがあって、文献と考古学の接点をみきわめるのに、大きく寄与する発掘調査の成果となった。考古学の発掘調査によって明らかになった遺跡や遺物を安易に文献史料と結びつけるわけにはいかないが、このたびの事例の場合は、歴史と文化の実相をみきわめるのに役立つ、貴重な調査のみりということができよう。

奈良県明日香村の大字岡の酒船石遺跡の調査は1992年の第1次調査で酒船石の北西斜面で大規模な版築と砂岩の石垣が検出されたことから始まる。そして1995年の第3次の調査で丘陵西側から四重の石垣と石敷がみつかるなどの注目すべき成果を積み重ねてきた。1999年の11月から開始された第12次調査で、調査区域の東側から階段状の石垣、調査区域西側の丘陵裾に石垣、さらに調査区域中央に石敷と南北溝、調査区域の南側では版築の丘に南面する石英閃緑岩せんりょくがんをリアルに加工した亀形の石造物と水槽の存在が明らかになった。

亀形の石造物は長さ2.4m・幅2mのいわゆる「亀石」であり、その亀の背に外径1.6mの円形の甲羅を彫り、内部の径1.2m・深さ20cmばかり掘りくぼめている。頭部から水を入れて、尾の部分から水を排出するしくみになっており、頭部には水を供給する石槽が位置していた。

この亀形石造物の加工は精緻であって、その石工がいったいどのような人びとであったかをたしかめうる史料はもとよりのない。だが参考となる史料がある。それは『日本書紀』の推古天皇二十年是歳の条に述べる、百濟からの渡来人とする「路子工みちこのたくみ」の伝承である。『日本書紀』によれば「路子工しきまろ」(名は芝耆麻呂)は造園の才能をもち、「山岳の形」を築造したという。そして彼は「須弥山の形及び呉橋くれはし」を作ったと記す。酒船石遺跡の巨大な亀形石

造物なども、こうした渡来系の技術者の手になるものかもしれない。2月の10日に酒船石遺跡の遺構とその亀形石造物を現地で観察したおりに、すぐに想起したのは中宮寺(もと法隆寺)蔵の「天寿国繡帳」の亀の図形であった。「天寿国繡帳」についての私見はほかでも述べたので、^(注1)ここでは繰り返さないが、両者がともに大和飛鳥の文化と神仙思想とのつながりを反映していることは興味深い。

『日本書紀』の齊明天皇二年是歳の条には、田身嶺(多武峰)の上に「観」を起てて^{ふたつきのみや}両槻宮を造り、「天宮」と称したことを記す。齊明女帝(皇極女帝の重祚)が神まつりの機能を保持していたことは、たとえば女帝みずからがひでりのつづくなかで、「天を仰ぎて」雨乞いをし、大雨を降らせたという『日本書紀』の皇極天皇元年二月の条の記事にもうかがうことができる。その雨乞いはたんなる民間信仰にもとづく雨乞いとはおもむきを異にする。「天」を意識しての「四方拜」の中国的要素を内包した雨乞いであった。『日本書紀』はこの女帝を「古道を順考」した天皇とその即位前紀に述べるが、その「古道」には、神祇信仰ばかりでなく、道教の信仰なども重なっていた。齊明女帝が、古代の支配者が「神仙境」とみなしていた吉野に「吉野宮」を造営したのも偶然ではない。田身嶺の「観」を「天宮」と^(注2)みなしたのにも、道観のおもむきが重なる。

ところで研究者の中には、前述の酒船石遺跡を両槻宮とみなす説もあったが、そうではあるまい。『日本書紀』に記す両槻宮は、田身嶺の上に位置し、この酒船石遺跡の地域とは直接にはつながらない。酒船石遺跡は、やはり『日本書紀』の齊明天皇二年是歳の条に記載する、「宮の東の山に石を累ねて垣となす」と明記する「石山丘」こそがふさわしい。しかもこの酒船石遺跡の石垣や石敷きの石には、天理砂岩が数多く使われていた。『日本書紀』では石垣に^{いそのかみやま}「石上山」の石を用いたとするが、その「石上山」とは、天理市^{ふる}布留に鎮座する石上神宮周辺の山であって、天理砂岩産出の地域であった。

石上神宮が鎮魂(ミタマフリ)の社として、遅くとも4世紀後半のころから祭祀されてきたことは、別に詳論した^(注3)が、齊明の朝廷がなぜ石上山の石をとくに選んで「石山丘」を構築したのか、かなりの距離を運搬した膨大な労力を、『日本書紀』は「功夫を損し費すこと三万余、垣造る功夫費し損すこと、七万余」と表現している。齊明女帝は神祇の信仰をも重視していたことを物語る。大亀が蓬莱山などの道教の三神山や西王母を支えるという信仰は、楚の詩人屈原らの詩集『楚辞』や山東省沂南の後漢末の沂南画像石などにもみいだされるが、霊亀の信仰は朝鮮半島にもあった。高句麗の長寿王二年(414)に建立された、有名な好太王碑の碑文の第一段には、^{すうむ}鄒牟(朱蒙・東明王)の建国神話が見えている。その神話でも鄒牟は亀に乗って大河を渡る。

古代の日本においても霊亀の信仰が早くから存在したことは、天平改元が瑞亀の貢上に

もとづき、靈亀や神亀の年号ばかりでなく、『古事記』の神武天皇東征伝承では大亀に乗るさおねつひこ槁根津日子がその水軍を先導し、『日本書紀』の雄略天皇二十二年七月の条の浦島子の伝承では、大亀を得て蓬萊山におもむく。そして天武天皇十年九月の条には周防国からの赤亀献上の記事などがみえている。

酒船石遺跡の亀形石造物は酒船の丘の湧水を供給する石槽の機能をもつが、そのありようは新羅の雁鴨池の石槽のいわゆる亀石と同類といえよう。それならなぜあのようにリアルで大きな亀形石造物を設置したのか。天寿国繡帳の「寿国」は無量寿經の「寿国」に由来するが、その天寿国には道教の神仙思想の「寿国」が重層していた。酒船石遺跡の東側石段は各段の幅約60cm・高さ25cmで、8段の石積みを示す。南北幅約6m・高さ約2mのその石段はいったい何を意味するのか。その発掘現場を実見したさい、その場には威儀をただした貴族・官人たちが並び立ったのではないかと想像した。たんなる給水・配水の施設ではない。西側を限る砂岩石列から東側の階段状石垣までの間は12m四方の石敷きとなっており、「聖なる祭苑」のたたずまいが浮かぶ。まつりやト占などが行われた場であったかもしれない。したがって大形の亀石が設けられたのではないか。

齊明天皇の「治す政事」と誹謗した蘇我赤兄の言葉のなかには、「舟に石を載みて、運び積みて丘にすること」があげられている。時の人びとの批判をかえりみず、あえてこのような「石山丘」を築造したのか。その背景には、当時の東アジアの情勢をかえりみなければならぬ。

遣唐使の派遣は、630年から838年までのおよそ200年の間に正式の遣唐使はわずかに12回(ほかに送唐客使2回、迎入唐使1回)であったが、第2回653年、第3回654年、第4回659年と、遣唐使の派遣は650年代だけでも3回に及ぶ。これはいったいどうしてなのか。その理由については中国側の史料に則して検討したことがあるけれども、^(註4)唐の高宗は永徽二年(651)、その「璽書」で新羅を支援して百濟および高句麗を索制する政策をうちだしていた。そうした情報は百濟使らから伝えられる。そのような状況のなかでのあいついだ遣唐使の派遣であった。『新唐書』によれば白雉の遣唐使は、出兵して新羅を援けよとの出兵命令をうけている。蝦夷の征討を断行し、齊明天皇五年(659)の遣唐使が蝦夷を人質として朝貢したのも、東夷のなかの倭国の權威を誇示しようとしたのではないか。「大いに倉庫を起てて、民財を積み聚め」、^{あつ}「長く渠水を穿りて、公糧を出し費す」その治政や労働力を結集しての「石山丘」の築造も、そうした動向と無関係ではない。

2. 富本銭と出水の苑池

奈良県明日香村の飛鳥池遺跡から大量の富本銭が出土したのも、『日本書紀』の天武天皇

十二年四月の条には、「今より以後、必ず銅銭を用ゐよ。銀銭を用ゐること莫^{なか}れ」に対応する。和同開珎以前に銅貨が存在していたことは推測されていたが、その実際は不明であった。この詔の「銅銭」は「古和同」のたぐいといわれたりもしてきた。今回の飛鳥池遺跡からの大量の富本銭と鑄型などの出土によって、天武天皇十二年四月までに、富本銭が鑄造されていたことがたしかとなった。

唐の通貨開元通宝(621年に鑄造はじまる)と富本銭とは類似するが、この鑄造銭には「富本」とあってその左右には七曜文がある。富本銭が見つかったことの記者発表をうけてのマスコミの報道では、その多くが「わが国最古の貨幣」としたが、それはあやまりである。天武天皇の詔にも明記されているように、すでに銀銭が存在していた。いわゆる無文銀銭がそれで、17ヶ所から200点をこえる銀銭が出土している。天智朝の創建とみなされている崇福寺の塔心礎にも埋納されていた。

富本銭を厭勝銭とみなす説には賛同できない。もっとも通貨としてどれほど流通していたかは今後の検討を必要とする。藤原京跡で2点、平城京跡で2点、大阪市天王寺区の細工谷遺跡で1点などと出土例が限られている。富本銭発見の報道のあと、長野県下伊那郡高森町の下市田「武陵地第1号墳」から明治後期に出土したと伝えられる富本銭1点、長野県飯田市で1点が確認されたが、その流通の範囲も現時点ではさだかではない。

壬申の乱を實力で戦い抜き、戦いのさなか、漢の高祖にならって、紅旗を立て紅衣を着用させて戦意を高揚させた大海人皇子(天武天皇^(注5))は、「天文通甲」に詳しく、占星台を築かした開明派の王者であった。「飛鳥浄御原令」をつくり、大藤原京建設のプランを策定し、従来の跪礼・匍匐礼を立礼に改めて、あらたに日本的な明・浄・正・直を階位名とする48の位階を定め、あらたな朝服を着用せしめた天皇であった。天智天皇八年(669)の遣唐使任命から大宝元年(701)の遣唐使任命までの期間には、遣唐使の派遣は中断していたが、新羅との交渉は頻繁に行われ、いわゆる白鳳文化も天武朝を中軸にして結実した。富本銭の鑄造とその発行にも、東アジアのなかの日本独自の貨幣づくりによって、国威を内外に示そうとした意図をくみとることができる。

私が注目しているのは「富本」という鑄銭の命名である。『漢書』の食貨志には、「食足貨通、然後国実民富、而教化成」とみえている。そして『芸文類聚』には、後漢の名将馬援が五銖銭の再鑄を進言して、「富民之本、在於食貨」と述べたことを記す。この「富本」の思想は元正朝にもうけつがれていた。たとえば、靈龜元年(715)十月の記には「国家の隆泰は、要は民を富すに在り。民を富すの本は務めて貨食に従る」と明記されている。富本銭の命名にも、天武朝の政治理念の一端をみいだすことができる。

1999年の1月18日からの発掘調査で明らかとなった明日香村出水の飛鳥京跡苑池遺構は、

おそらく『日本書紀』の天武天皇十四年十一月の条にみえる「白錦後苑」^{しらしきあとのその}にあたると考えられる。この遺構は現在の飛鳥寺の南に位置し、西側を飛鳥川が流れる。左の前方に甘樫丘、左の後方に川原寺があって、その場所は飛鳥浄御原宮跡推定地の内郭外側の地と想定されている。同年6月28日、約1,000㎡の発掘現場にのぞんで感慨一入のものであった。

大和飛鳥の苑池遺構については、島庄遺跡・石神遺跡・飛鳥池遺跡・小墾田宮推定地で検出されていたが、いずれも調査の範囲が狭く、小規模であった。このたびの出水の苑池遺構の調査は、苑池のおよそ1/5ぐらいではあったが、島庄遺跡でその一画がみつかった方形の池をはるかにこえる大苑池であった。

池中の原位置に立つ石造物や1916年に掘り出されて京都の野村別邸にある出水の酒船石の掘りだし跡のそばで、水を供給する石槽がみつかったにとどまらず、池中に石敷の島(6×11m)を築く。西辺の護岸に接する柱の残存と柱穴は、池にのぞむ構造物(床台のたぐいか)を想像させる。北側の張りだし部分の護岸と西辺の護岸との石組みは、おもむきを異にするが、下層の部分は斉明朝ごろの築造ではないかという。北側の張り出し護岸の部分は、^{なかのしま}中島の可能性がある。

池底石敷きの東部は保存状態が良好で、南北方向に目地^{めじ}が三条くっきりと浮かぶ。池中の石敷きの島は、池底の敷石よりもやや大きい石を約60cmぐらい積みあげている。藤井寺市の津堂城山古墳の前方部、その南東側内濠に、石を積んだ上に、大きな水鳥二つと小鳥1つの埴輪^(注6)が立っていたのが想起される。出水苑池の石敷きの島は水が満ちてくると水中にかくれる。その島の上には亀や水鳥などの「置き物」があったかもしれない。

東アジアの苑池の文化は、秦・漢の「上林苑」や北魏の「華清園」など、中国の禁苑にさかのぼる。^(注7)中国の苑池には宮殿に付属する内苑と「上林苑」のような広大な外苑とがある。出水の苑池遺構は内苑の類であろう。

私が古代の苑池に関心をいだくようになったのは、日本の庭園文化史にかんするたしかな史料といってよい『日本書紀』の推古天皇三十四年五月の条について考えたおりからである。そこには蘇我馬子が飛鳥川のほとりの家で庭をつくり、池の中に「小嶋」を築いたと述べている。そこで馬子を「嶋大臣」というとする伝えである。この「小嶋」は中島であって、道教の神仙思想に由来する神山の思想が反映されていたのではないかとひそかな疑いをいだいてきた。

なぜなら『三国史記』の百濟本紀には百濟の武王がその三十五年(634)の三月に、宮南に池を穿り、四岸に楊柳を植え、水中に嶋嶼を築いて「方丈仙山に擬す」と書かれているからである。それ以後、韓国・朝鮮民主主義人民共和国・中国を訪問するたびに、なるべく苑池関係の遺跡を見学するようこころがけてきた。島庄遺跡で方形池の遺構の一部がみつ

かったおりには、大城山城の池や安鶴宮の池などを参考にしよう助言したことがある。出水の苑池遺構の池のかたちは直線と曲線からなり、慶州の雁鴨池や同じく慶州の龍江洞の苑池に類似する。

出水という地名が物語るように、その地は飛鳥浄御原宮の北側(後方)にある湧水の地である。これまでは「白錦後苑」を「しらにしきののちのその」とよむ説が多かったが、前苑に対する後苑ではなく、宮殿北側のうしろのその(あとのその)とよむべきではないかと思っている。ここで改めて想起するのは、『万葉集』(4261)の天武天皇を賛美したつぎの歌である。“大王は神にしませば水鳥のすだく水沼を皇都となしつ”の詠である。この出水苑池のあたりは、水鳥のすだく水沼であった可能性が高い。

天武朝のころには七夕の宴があったことなどを論証したが、多祢島(種子島)^(注8)などの外賓饗宴のほか、七夕の宴もこの苑池で行なわれていたのではないか。

3. 杵築大社の神殿巨柱

古代の文献にみえる伝承と発掘の成果とがかなり対応した事例に、1999年の9月から開始された島根県大社町の出雲大社境内地の調査がある。1957・58年には現拝殿のそばの調査が実施されて、出雲大社の鎌倉・室町時代のころの神殿のありようの一部が確認されたが、このたびの発掘調査によって、国造千家家所蔵の「金輪造営図」に描かれた宇豆柱(南側中央の外に張り出す柱)が検出された。その発掘調査については事前に助言を求められていたが、「金輪造営図」のとおり3本の巨柱を組み合わせた柱材と柱穴約3mと、そのまわりを人頭大の石で築きかためた巨大な遺構であった。その3本目がみつかった直後の2000年の4月25日、その状況を実見して、伝承と史実との関係をはっきりと確認できた。

出雲国造家の社伝では、出雲大社の神殿の高さは十六丈(約48m)あったと伝えている。国造家の記録とされる『国日記』の天仁三年(1110)の「寄木の造営」のおりの大社造営の巨木は長さ十五丈(約45m)、直径一丈五尺(約4.5m)と述べる。天禄元年(970)に源為憲が書いた『口遊^{くちずさみ}』には「雲太、和二、京三」の語を引いて「雲太」は城築明神の神殿、「和二」は東大寺大仏殿と書きとどめている。

「金輪造営図」については、本居宣長が『玉勝間』のなかで「出雲大社の御事」として、国造家に伝わる「金輪造営図」を写して引用している。その図は現伝の千家家の図とは若干異なっており、南北の宇豆柱の位置もちがう。千家家所蔵の現伝「金輪造営図」との関係が改めて問題となる。ところが残念なことに、この造営の指図がいつの時代の造営のものかさだかでない。

高さ十六丈という高くて雄大な神殿などありうるはずがない、とこれらの伝承や記録を

否定するむきが多かった。そして『口遊』の伝えはたんなる広さを語ったものとする説もあった。もし『口遊』の例を広さというなら、杵(城)築明神の神殿よりも東大寺の大仏殿や平安京の大極殿の方が広い。私はやはり高さを比べての「雲太、和二、京三」ではないかと考えてきた。そのことは出雲の神話についてはじめてまとめた『出雲の神話』(淡交社、1965年)でも言及していた。鎌倉時代になると「大廈の神殿は神徳に非ず」として神殿の規模は縮小されるが、平安時代後期の「宣旨」に「天下無双の大廈、国中第一の靈神」と歌われ、『諸社効能』に「出雲大明神は本朝鎮護の靈祠、当州殊勝の名社」とあるように、平安時代後期のころにおいても、杵築大社はなお「天下無双の大廈」とたたえられていた。鎌倉時代はじめの『夫木集』に収める寂連法師の歌に“やはらぐる光や空に満ちぬらん雲にわけ入る千木の片そぎ”と詠みこまれているのを文学的誇張の表現とはいいいがたい。

かつて大林組が福山敏男先生の監修のもと、出雲大社の復元を(注9)こころみだが、その復元については賛否両論があった。

常識では考えられないその高さはいかにも不安定である。しかし古代の杵築大社を造営した国造とその信仰者たちは、その構造の安定よりも、天高く底津岩根深く、九つの神柱をもつ神殿を出雲信仰の伝統のなかに建立したのである。古代エジプトのピラミッドでも、王や王族の権威を象徴するためばかりでなく、その巨大なピラミッドの構築には、再生の信仰がともなっていた。

記録によれば、杵築大社の神殿は平安時代の中期から鎌倉時代の初期にかけて200年あまりの間に7度も倒壊したことになる(少なくとも6度)。その都度再建をこころみそのエネルギーは、国造の権威のみで形づくりうるはずはない。そこには政治的にはミヤコの支配に従属していても、杵築大社を信仰する人びとの意地と誇り、そして出雲信仰の独自の文化の輝きを実感する。

現伝唯一の完本である『出雲国風土記』は天平五年(733)の二月に勘造された。そのはじめに、「合せて神社三百九十九所」とし、「一百八十四所」が神祇官の台帳に記載する社であり、「二百一十五所」がそうではない社と記す。そのあまたの社のなかで、大社と明記しているのは杵築大社と熊野大社だけである。『延喜式』に所収する出雲国のいわゆる式内社は「一百八十七座」で、その社数は、大和国・伊勢国について第3位となる。そこで大社で特筆するのは杵築大社のみであった。

なぜ古文献の多くが杵(城)築大社と書いているのか。それは多年の謎であった。出雲大社の発掘現場におもむいて「きづき」の意味がわかったような気がした。あの巨大な神柱を築き、人頭大ほどの石を数多く用いてかためているありようは、まさに杵(城)築の大社であった。その石群をみると、南側がやや高くなっている。宇豆柱を手前から柱穴に斜め

に入れて、輓轡を用いて建立した工夫が想像される。

出雲国造の神賀詞の奏上が史料にみえるのは、『続日本紀』の靈龜二年(716)二月の出雲臣果安はたやすの時からであり、その最後は『続日本後紀』の天長十年(833)四月の出雲臣豊持の時までである。したがって9世紀の前半以後は神賀詞の奏上は消滅したと考えられやすいが、必ずしもそうといえない。『権記』の長徳元年(995)十月六日の条を神賀詞奏上にかんする記事とみなす説(注10)もあり、『延喜式』にもかなり具体的に神賀詞奏上の祭儀を記述している。平安時代に入っても出雲国造の神賀詞奏上はつづけられていた。

それなら出雲臣果安の靈龜二年二月以前はどうであったか。現伝の「神賀詞」には「百八十六社にます皇神たち」と書いている。前述したように『出雲国風土記』は神祇官台帳の社を「百八十四」と記し、『延喜式』では「百八十七」とする。天平五年(733)の『風土記』の社数と延長5年(927)完成の『延喜式』の社数との間には三社のひらきがある。問題は現伝の「神賀詞」が「百八十六社」と述べる時期である。『風土記』よりも二社多い神社が官社化した時期は天安元年(857)以前であることを論述(注11)した。しかしこの考証は現伝の「神賀詞」のなりたちを考察したものであって、原「神賀詞」の成立をその時期を指摘した論究ではない。

私見では、靈龜二年二月の出雲臣果安の神賀詞奏上以前にも出雲国造による神賀詞の奏上はあったと考えている。それは「神賀詞」にみえる「皇孫命すめみまみことの近き守神」として列挙されているのは「大御和おおみわ(大神)の神奈備」・「葛木の鴨うなでの神奈備」・「宇奈提」・「飛鳥の神奈備」に坐います神々であったからである。平城京の時代ではこれらの神々は「近き守神」とはならない。飛鳥浄御原宮あるいは藤原京の時代こそがふさわしい。

『日本書紀』の斉明天皇五年是歳の条には、「出雲国造おおに命せて、神の宮を修巖せしむ」とある。この「神の宮」が熊野大社か杵築大社か、両説があるけれども、この文の「修巖」の場合は斉明朝廷が命じたもので、国造らみずからによる造営ではない。この例から平安時代の杵築大社造営を論じた見解もあったがそれはあやまっている。少なくとも7世紀後半のころに杵築大社は存在していた。したがって8世紀の初葉に成書化した『古事記』や『日本書紀』のいわゆる出雲系神話においても、「底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽(千木)たかしり」(『記)、「柱は高く大し、板は広く厚く」とその巨大さが述べられたのである。

古代日本の神社建築としては、伊勢神宮の神明造、住吉大社の住吉造、杵築大社の大社造が有名である。その建築様式について神明造を穀倉型神殿、住吉造を祭場型神殿、大社造を宮殿型神殿とする分類(注12)もあるが、平入りの神明造と妻入りの大社造りではその様式ばかりでなく、世界観・宇宙観のちがいもその建築様式に示されている。杵築大社の神座は北ツ海(日本海)側に面しており、その神殿前には宗像三女神をまつる筑紫社がある。『古事

記』(上巻)によれば大穴牟遲神(大国主神)は宗像三女神のなかの多紀理毘売命とも婚姻する伝えになっている。たしかに杵築大社創建の背景には北ツ海文化のつながりがあるが、さらに天高く地深くの神柱の信仰には垂直的世界観・宇宙観が投影されていた。

神のよりしろとしての神柱の信仰は、縄文時代にさかのぼる。青森市の三内丸山遺跡の巨大な柱列、金沢市のチカモリ遺跡や能都町の真脇遺跡などの木柱列などにもそのむかしがうかがわれる。松江市の田和山遺跡は巨大な三重の周濠で囲まれている。その築造は弥生時代前期後半から中期前半のころとみなされているが、高地性集落などとは異なって周濠内には住居跡がない。そして山のいただきに二棟があって、中央の建物遺構には九つの柱穴がある。中心の掘立柱には小さな礎石があった。はたして同時期の柱穴か、今後の検討をまたねばならぬが、もし同時期に九つの柱穴の構造物があったとすれば(穀倉的な祭祀のたてものか)、その様式は小規模ながら九本の柱からなる大社造のルーツとなりうるかもしれない。

出雲大社の境内地遺跡の今後の調査は、心の御柱(岩根御柱)と側柱の検出とその範囲の確認へと進む。その調査についても助言したが、このたびの発掘地の東側からは古墳時代前期の勾玉・白玉などの祭祀遺物が出土している。

そこで杵築大社が造営された聖域のありようを改めて吟味しておく必要がある。『出雲国風土記』で出雲を冠している山と川は、出雲御崎山と出雲大川(斐伊川)だけである。その御崎山につながる八雲山が杵築大社の神奈備であり、東に亀山、西に鶴山の三山に囲まれた聖なる場所に杵築大社の神殿が建立された。

銅戈や勾玉が埋納されていた磐座は、大社東方約200mの^{いのちぬし}撰社命主神社の背後にある。鎌倉時代中期ごろの「出雲大社并近郷絵図」にも巨岩が描かれている。慶長年間の「千家文書」では命主社は「命石社」とよばれていた。^(注13)神奈備山と磐座を配して、遅くとも古墳時代前期ぐらいからまつりの行われていたその聖域に、「雲に分けている」大社造の神殿が造営されたのである。その規模が縮小した南北朝のころにあっても、北畠親房が『二十一社記』のなかで「出雲国の神、我国の大地主に坐す也」と畏敬されていた。

さらに注目すべき点がある。発掘された宇豆柱の上部にはベンガラ(赤色顔料)が付着していた。大社の古絵図の神殿が朱塗りで、「金輪造営図」が梁と桁を朱色に描き、出雲国造の「神賀詞」に「八百丹杵築宮」と記すのと合致することを付記する。

本稿では近時の発掘調査の成果と古文獻ならびその伝承とが符合し対応する事例をとりあげて論究してきたが、冒頭でもことわったように、考古学上の遺跡や遺物と、古文獻の記載とを短絡的に結びつけるわけにはいかない。しかしここで問題とした遺構・遺跡と文献伝承とのまじわりによって、古文獻伝承の信憑性がたかまり、遺構・遺跡の実像がより

たしかになったことは大きなみりであった。考古学と文献学とは対立するのではなく、史実究明のための補完の関係にあるとあってよい。

(うえだ・まさあき＝当センター理事・京都大学名誉教授)

- 注1 上田正昭「亀石と繡帳」(『明日香風』75号)。なお『三国遺事』に引用する『駕洛国記』首露亀旨峰降臨神話にも亀の伝承がある。
- 注2 古代日本に道教が流伝していたことは、『古代の道教と朝鮮文化』(人文書院 1989)でも指摘したが、斉明女帝の「観」については「天宮の夢」(『古代からの視点』PHP出版研究所 1978年)で考察した。
- 注3 石上神宮の祭祀とその伝統については「石上神宮と七支刀」(『日本のなかの朝鮮文化』9号)ほかでも論究したが、「石上の神宝と祭祀」(『古代伝承史の研究』所収 塙書房 1991)に私見をまとめている。
- 注4 上田正昭『藤原不比等』(朝日新聞社) 1976
- 注5 『古事記』(序)に「絳旗兵を輝かし」と述べ、『日本書紀』(卷第二十八)に「赤色を以て衣の上に着く」と記す。『万葉集』(199)には「捧げたる幡のなびき」が詠みこまれている。
- 注6 森浩一「記紀の考古学」(「論座」1999年9月号)
- 注7 河上邦彦「東アジアの禁苑とその内部施設」(『発掘された古代の苑池』所収 学生社) 1990
- 注8 上田正昭「古代飛鳥の七夕信仰」(『明日香風』69号)、上田正昭「七夕の伝法」(『日本風俗史学会40周年記念論文集』つくばね舎) 2000
- 注9 大林組『古代出雲大社の復元』(学生社) 1989
- 注10 井上寛司『大社町史』第3編第3章(大社町) 1993
- 注11 上田正昭『日本神話』(岩波新書) 1970
- 注12 川添 登『「木の文明」の成立(下)』(NHKブックス) 1990
- 注13 千家和比古「古代出雲大社の心象風景」(『古代出雲大社の復元』所収 学生社) 1989

* 9月10日現在の発掘成果にもとづいて記述したが、岩根御柱(心の御柱)の今後の検証が期待される。